

カーシスンダラ物語
——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・
カルパラター』第29章和訳——

引 田 弘 道
大 羽 恵 美

キーワード：アヴァダーナ、仏教説話、クシェーメンドラ、仏教説話図

解 説

1. あらすじ

怒りの火を静める優れた徳性の持ち主の賞賛 (1)

ヴァーラーナシーの王ブラフマダッタの二人の息子、カーシスンダラとカーラブーがいたが、前者は皇太子に相応しかったにもかかわらず、出家したいと心にきめる。(2-7)

かの王子は王に出家を請う。(8-19)

王は当初、王子の出家を禁止する。(20-34)

王子は決心を変えず、根負けした王は大臣の勧めにより、王子の出家を許す。(35-37)

王子はあらゆる生類に慈愛の心を持って森で生活する。彼は忍耐を実践したため、「クシャーンティヴァーディン」として知られる。(38-42)

王位を継いだカーラブー王は王妃たちと一緒に遊林に戯れ、カーシスンダラのいる苦行林に至る。(43-48)

カーラブー王が眠りに落ちている間、後宮の妃たちは聖者を取り囲む。(49-50)

王は目覚めると、王妃たちが瞑想するクシャーンティヴァーディンを取り囲んでいるのを見る。(51-55)

王は嫉妬から毒のような言葉を仙人に投げかける。(56-60)

王はさらに仙人の忍耐を試そうと、彼の両手を切り落とす。(61-66)

仙人の忍耐 (67-68)

王は自身の行為を恥じ、彼に許しを請う。(67-72)

クシャーンティヴァーディンによる許し (73-75)

仙人による真実語 (76—78)

王は仙人に罪の許しを請う。(79-80)

仙人は人々や王さえも救うため、無上正等覚を求める。(81-84)

過去世と現在世との結合 (85)

比丘たちの歓喜 (86)

2. 対応する文献

この物語の主人公、カーシスングラ (Kāsisundara) という名前は、Avadānaśataka (2 : 27) に認められるが、そこではバナレスの王 Brahmadata の王子で、出家入山し、kinnarī の誘惑を受けるが、それに打ち勝ったという内容である。対応する漢訳の『選集百縁経』巻8 (大正4、240b-c) でも同様の内容である。波羅奈国王の孫太利太子が、入山学道し、五神通を獲得した。美しい緊那羅女は艶かしい姿をし、歌を歌って舞い、染著の心を起こさせて仙人の道から逸脱させようとしたが、太子は反対に、この世は無常であり、どんな美しい容姿も必ず醜く変化してしまうと説く。これを聞いた緊那羅女は自身の罪咎を懺悔し「将来生死を断って、あなたの近くで仏果を獲得したい。」という誓願を立てる。これは先の『カルバラター』の物語と大きく異なるものである。反対に『カルバラター』とほぼ同じ内容は Saṅghabhedavastu (SBV) Pt. 2 に認めることが出来る。そのあらすじは以下のとおり。

ヴァーラーナシーの王ブラフマダッタの二人の息子、カーシスングラとカリプーが生まれる。それぞれの名前の由来 (pp. 4-5)

長男のカーシスングラ、王の政治を見て、嫌気がさし、王に出家を請う。(p. 5)

王は当初、王子の出家を禁止する。王子は絶食する。(p. 5)

王、大臣やプローヒタ、さらには彼らの息子は、王子の出家をくい止めようとする。(pp. 5-7)

王子は決心を変えず、根負けした王は大臣やプローヒタの息子の勧めにより、王子の出家を許す。(p. 7)

王子はあらゆる生類に慈愛の心を持って森で生活する。肉食獣でさえ、彼の庵で安心して過ごし、罪を犯さないの、「クシャーンティヴァーディン」として知られる。(p. 7)

王子は阿蘭若の草では生きていけないため、苦行林を出て、父の宮殿の近くの遊園の静かな場所で修行する。(pp. 7-8)

王位を継いだカラプー王は、春の季節に王妃たちと一緒に遊林に戯れる。(p. 8)

王が眠りに落ちている間、後宮の妃たちは瞑想している仙人を取り囲む。(p. 8)

王が目覚めると、王妃たちが瞑想するクシャーンティヴァーディンを取り囲んでいるのを見る。(p. 8)

王は心が嫉妬で満ち仙人に近づく。(p. 8)

王は彼が本当にクシャーンティヴァーディン仙人かどうか試そうと、彼の両手・両足を切り落とす。(p. 8)

仙人の忍耐と無上正等覚を得たいとの誓願 (pp. 8-9)

仙人を守る神々の怒りと自然災害 (p. 9)

王は占い師を呼び、災害の原因を探る。(p. 9)

王はバリの食物などで神々を供養し、神と仙人に許しを請う。(pp. 9-10)

クシャーンティヴァーディン仙人の許し (p. 10)

仙人による真実語 (p. 10)

王は仙人の両足に頭で触れて挨拶をして立ち去る。(p. 10)

過去世と現在世との結合 (pp. 10-11)

以上、SBVは『カルパラター』と近似しており、後者は前者の内容を参照しながら、森やそこで戯れる後宮の妃たちを巧みに描写しているように思える。

参考文献

- Apte, P. V. S. 1986. *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised and Enlarged Edition, Kyoto: Rinsen.
- Gnoli, R. ed. 1978. *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu. Being the 17th and last section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Pt 2, Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente. (= SBV)
- Hara, Minoru. 2001. "Hindu Concept of Anger: *manyu and krodha*," *Festschrift R. Gnoli*, Serie orientale Roma, XCII-1 Roma, 419-444.
- Strabe, von Martin. 2010. "Aus Kṣemendras Bodhisattvāvadānakalpalatā: Das Kāśīsundarāvadāna (Nr. 29)" *ZDMG*. 160-1: 89-120.
- ゴンダ J、辻直四郎校閲、鎧淳訳. 1974 (2014) 『サンスクリット語初等文法』春秋社.
- 原 實. 1979. 『古典インドの苦行』春秋社.

和 訳

怒りの火を静める優れた徳性の持ち主の賞賛

かの優れた心の持ち主は (sattva-viśeṣaḥ: snying stobs kyi khyad par)¹、感情あるものたちのなかで (sattvānām : snying stobs ldan pa'i) 全ての生類の (sarva-sattva-: sems can thams

¹ () 内のコロンの後の語は対応する蔵語訳の語で、必要と思われる箇所に原文のままの形で加えた。

cad) 喜びの原因である。

身体が滅亡しても怒りの火を十分に静めるような (śamayati: zhi bar 'gyur)² 彼は勝利する (jamayati: rgyal gyur cig)³。(1)⁴

カーシスンダラ物語

法の説示のおり (dharmopadeśe: chos bstan pa la)、世尊は首座比丘のカウンディンヤ (Kaunḍinya: kau ṅḍi nya) の物語に関連して、ほかの比丘たちに問われると、(次のような) 話をした。(2)⁵

カーシスンダラ王子、出家を決心

ヴァーラーナシーの王であるブラフマダッタ王に (Brahmadattasya: tshangs pas byin gyi) 二人の息子がいた。

(一人は)カーシスンダラ (Kāśisundara: kaa shi mdzes pa)⁶ という名前で、(もう一人は)カーラプー (Kālabhū: dus kyi sa)⁷ であった。(3)⁸

カーシスンダラは皇太子の灌頂に (yauvarājyābhīṣeka- : dbang ni bskur) 相応しい王子であったが、

王権は法と同時に非法からもなりついていると (dharmādharmamayam rājyam : chos dang chos min) 判断し、長い間考え込んだ。(4)

「若さは一瞬で移ろい、人生は波のように不安定だ。

夢の中の結婚のような (svapna-vivāhe : rmi lam bag ma len)⁹、迷妄の根本である (moha-

² 原文は śamayati であるが、Śtraube [2010: 95, n. 22] は、gamayati の読みを提示する。北インドの古文書では、śa と ga との書体の混同はしばしば起こり、そのためではないかと彼は判断する。原文は śamayati kopāgniṃ śāntim であるが、これだと同義語の繰り返しの恐れがある。

³ 原文は jayati であるが、Straube [2010: 95, n. 21] は、蔵語訳 (:rgyal gyur cig, 「勝利あれ」) に従った jayatu の読みの可能性を指摘する。

⁴ 韻律は Āryā。

⁵ 第2偈からの韻律は Anuṣṭubh。ただし同偈 pāda a の韻律は、--v--vv- と不正規形となっている。ゴンダ [1974: 140] 参照。

⁶ SBV (p.4) には、カーシ王に美しい王子が生まれたので (ayam ca dārakaḥ abhirūpo darśanīyaḥ prāsādikaḥ, kāśirājasya ca putraḥ) 「カーシスンダラ」(Kāśisundara) と命名された、とある。原文には「カーシスンダラ」と「カーシスンダラ」の両方が使われているが、拙訳では全て「カーシスンダラ」とした。

⁷ SBV (p.5) には、弟が生まれたが、そのときベナレスの市民に大きな不幸が起こったので、「カリプー」(Kalibhū) と後宮の妃たちは命名した (antahpurajanaḥ kathayati : deva asya janmani vārāṇasyāṃ pauraṇapadānāṃ mahān kalir abhūt) とある。

⁸ 第3偈 pāda a の韻律は、-v--vvv- と不正規形となっている。ゴンダ [1974: 140] 参照。

⁹ 「夢の中での結婚式」がはかないものであることに関して、Straube [2010: 97, n. 26] は、同

müle: rmongs pa'i rtsa)、この王権に私の興味は (matih : blo) ない。(5)
愛欲の嘆きで満ち、幾度とない幻惑と迷妄からなる¹⁰輪廻は、
売春婦の涙のように空虚であり、(それには何の) 実在性も (satyatā : bden pa) ない。¹¹ (6)
私は罪もなく、家から家のない状態になろう (=出家しよう)¹²。
貪欲ある者の剣の職業と結びついた栄華が一体何になろうか¹³。」(7)

王子、王に出家を請う

分別で心が清らかになった王子は (rājasūnur) このように考えて、
王に近づいて、阿蘭若に (araṇya-: nags su) 行きたいと願って言った。(8)
「王よ、このような享樂の集まりは私には全くふさわしくありません。
皇太子の灌頂に (yauvarājyābhiṣeka-: rgyal tshab dbang ni bskur) 適した準備をお控え下さい。(9)
王の繁栄は怒りの火で¹⁴とても熱せられ、死刑¹⁵、緊縛、恐怖、苦勞¹⁶を引き起こします。¹⁷
父よ、これは私が決して重んじるものではありません。(10)
輝く王の主権がより残虐な行為で満ちているのは、
ちょうど墓場の火の炎のようですが、誰に嫌悪心をもたらしませんか。
(11)
光景は日傘で遮られ、払子の風で揺らめいていても、

じ『カルバラター』のテキスト3.146を指摘する。bhogakṣaṇenaiva viyogarogo vibhūṭayaḥ svapnavivāhatulyāḥ / vātāhatā dīpaśikhā sukhaśrīr unmattanṛtyaṃ bhavavṛttam etat // (3.146) ただし、pāda a は bhogāḥ kṣaṇenaiva viyogarogā に修正して読んでいる。

¹⁰ de Jong に従って、mahe を maye と訂正した。

¹¹ SBV (p.5) には、彼が父から王権を受け継いだ後、法と非法によって王権を行使して死後は地獄に落ちてしまう (naraka-parāyaṇo) と悲嘆したとある。

¹² 原文は pravrajyām であるが、de Jong に従って pravrajāmy anaghas (: sdig med rab tu 'byung) と訂正した。SBV (p. 5) には、yannv aham agārād anagārikāṃ pravrajeyam iti とある。

¹³ 原文は nistriṃśa-vṛtti-saṃsaktābhirāgaḥ kiṃ vibhūtibhiḥ であるが、いまひとつ文法的にはっきりしない。de Jong は saṃsaktābhī rāgaḥ (: reg gyur pa 'i [ṃam par 'byor la]chags pas) と読むべきとする。こうすれば、「剣の仕事と結びついた栄華によって貪欲は一体なんであろう。」となるが、これも韻律的には休止の箇所です。Straube [2010: 97, n. 29] は韻律の形も満足する読みとして、nistriṃśa-vṛtti-saktābhiḥ rāgināḥ kiṃ vibhūtibhiḥ を提案する。今回の訳は彼の読みに従った。

¹⁴ 原文は krodhāgni- であるが、de Jong に従って kopāgni- (: khro ba'i me) に修正した。

¹⁵ 原文は baddha であるが、de Jong に従って vadha (: gsod) に修正した。

¹⁶ 蔵語訳では、rdung 「殴打」。

¹⁷ SBV (p. 5) も、死刑・束縛・殴打といった刑罰を行うより、来世を恐れる賢者は森で苦行者の生活をするほうがましだという王子の言葉を記す。すなわち、varam vane valkalacīravāsasā phalāśinā vyādamṛgaiḥ sahoṣitam / na rājyahetor vadhabandhatāḍanam budhena kartuṃ paralokabhīruṇā // iti

高慢で酩酊した王たちは大罪の¹⁸地獄の穴に (pātaka-śvabhre: sdig pa dag gi g.yang la) 墮落します。(12)

柔らかい食事 (をとること) や柔軟な衣服 (を身につける) 習慣により繊細になった王たちの身体に、終には金剛石のように固い苦悩が襲いかかります。(13)

絶え間ない心配の苦悩や激しい渴望で嘆いても、
王権の熱情を好むような彼らに、迷妄による失神は (moha-mūrcchā : rmongs shing brgyal ba) 止まることがありません。(14)

狡猾で、宝が輝いており、いつも¹⁹二枚舌を使い、
欠点を見つけ出す王たちの仕事は他人を殺すことです。²⁰ (15)

『何百もの王から取り残されても²¹、高慢の私は他の誰にも近寄らないと (王は) 思っている。』

と言って、王たちの幸運の女神は (シュリー、Śrīḥ : dpal)²² ネックレスと払子をもって (hāra-cāmara- : do shal rnga yab) 笑っています。(16)

王たちの幸運の女神は (ラクシュミー、Lakṣmīr : rgyal ba'i dpal) は、団扇で溜息を明らかにし、真珠の連なりのような止めどもない涙を流しています。

まるでかつての王を思い出したことより、迷妄に覆われた (mohāvṛtā : rmongs pas bsgribs) かのようです。(17)

それゆえに、私は出家することで (pravrajyā- : rab tu byung ba) 世俗人としての生活を (jana-sthitiḥ) 捨てて、

満足な涼やかな影があり、熱を静める森に (vanam) 行きます。(18)

輪廻の道を休むことなく歩む者の、この肉体でさえ²³、維持しがたく、

絶えず衰退しています。ましてや大地を担う (王) は言うまでもありません。』²⁴ (19)

¹⁸ ヒンドゥー教では、5種の大罪を挙げる。brahmahatyā surāpānaṃ steyaṃ gurvaṅganāgamaḥ / mahānti pātakāny āhuḥ samsargās cāpi taiḥ saha // (Manusmṛti 11.54)

¹⁹ 原文は pade pade (: gnas dang gnas su)、Straube [2010: 99] の独訳は auf Schritt und Tritt。

²⁰ Straube [2010: 99, n. 33] は同文献の他の箇所 (13.32) にもある王の邪悪性を指摘する。

²¹ 原文は nṛpavaṃśaśatocchiṣṭām であるが、de Jong は蔵語訳を参考にして drptanṛpaśatocchiṣṭām (: mi bdag brgya lhag dregs ldan ma) と読むべきとする。一方 Straube [2010 : 99] は drptām nṛpaśatocchiṣṭām と読む。拙訳は Straube の読みに従った。

²² シュリー、またはラクシュミーは幸運の女神としての性格と、王と結びついた王権の性格とがある。真珠のネックレスは王の華美の側面、払子は権力の側面を暗示する。Straube [2010 : 100, n. 35] のほか、Apte [1986] の Śrī, Lakṣmī の項目を参照。

²³ 原文の pāda c は kāyo 'sya yat sadāpāyaḥ とあるが、de Jong と Straube [2010 : 100] は kāyo 'py ayam (: lus 'di yang) sadāpāyaḥ (: rtag tu gnod pa) と読むべきとする。拙訳は de Jong の読みに従った。

²⁴ SBV (p. 5) には、王子のこのような長い出家の願いの言葉はなく、単に王の近くに行き、両足に伏して、「父上、お許してください。私は出家いたします。」(tāta anujāniṣva, pravrajāmy agārād anagārikām iti) とだけある。

五、王子の出家を禁止する

このような非常に不快な息子の言葉を聞いて、王は
出家という (pravrajyā-) 言葉に動揺し、憂慮して (sodvegasa : mya ngan ldan pas) 彼に言った。(20)

「この偉大な家柄と帝国の (sāmrājyasya : yang dag rgyal srid) 繁栄のために、
息子よ、年老いた私によって希望が強く汝に結びつけられた²⁵。(21)

愛しい子よ、時宜を得ず²⁶希望を壊すようなことをしなさんな。

新鮮な輝き²⁷のある汝のこの若さは森には適さない。(22)

正しい協議の習慣を伴い、良き見解に専念し²⁸、

感官を制御した王たちにとっては、森でなくとも (avanam : nags med) いたるところで
苦行は (可能である。)(23)

本来の場所にあっても、蓮華は水に触れないで存在し²⁹、

森の中にあっても、アショーク樹は女性の足で踏みつけられて (開花するの) が見られる³⁰。(24)

自分の家でたやすく得られる享受でも目の病気がある限り (visūcikā : rmus chung ba)³¹、
その限り、一瞬で (目の) 対象は捨て去ることができる。(25)

自分の親族のうちの幸福を捨てて家から出て行っても、

人は慣れ親しんだ快樂から離れる苦しみに耐えることができない。(26)

ダルマは家にあっては、楽々と聞かれ、記憶され、実践される。

²⁵ 原文は āsānibaddhāvṛddhena であるが、de Jong に従い、āsā nibaddhā vṛddhena (: re ba mchog tu rnam par bcings) と訂正した。

²⁶ 原文は na kāle であるが、de Jong に従い、nākāle (: dus min) と訂正した。

²⁷ 原文は mahacchāyam であるが、de Jong に従い、navacchāyam (: gsar du mdzes pa) と訂正した。

²⁸ 原文は samantrābhyāsuyuktānām śaktānām であるが、Straube [2010 : 101] は samantrābhyāsuyuktānām saktānām と読む。拙訳も彼の読みに従った。

²⁹ 原文は niḥsaṅgasalilasthitih であるが、de Jong は niḥsaṅgasalilasthiteḥ と訂正する。但し Straube [2010 : 101] は原文のままに読む。

³⁰ アショーク樹は女性の足で踏まれると開花するという詩法の慣習があることを踏まえた表現。Apte [1986] を参照。

³¹ 原文の visūcikā, viṣūcikā は Apte [1986] に従えば、「コレラ」といった消化系の病気とされている。Straube [2010 : 102, n. 43] は 10 世紀頃の作品 Mokṣopāya 1.16.42 (tāvan muhyaty ayaṃ loko mūko vilulitāsayah / yāvad evānusandhatte tṛṣṇāviṣūcikām //) に対する注釈者 Bhāskarakāṇṭha (17 世紀) の注釈を引用している。そこでは、viṣūcikā viṣabhakṣaṇakṛto rogaviśeṣaḥ (毒の病気とは毒を飲むことで引き起こされる特別な病) とある。さらに Straube [2010 : 102, n. 43] は、この語が登場する『カルパラター』の箇所を指摘する。即ち、kṣaṇam pītvā ca pānīyam papātāpta-viṣūcikaḥ (11.64cd), sadyo viṣūcikārtasya manmūlakam analpakam / (11.84ab), visūcikaiva paryante babbhūvāpara-janmani // (11.85cd), rātrau visūcikākrāntas cukrośa vipulavyathaḥ // (21.14cd)

森にあっては、干乾びた者たちの (*śuṣkānām : skam po nams*)³² 聴聞、記憶、実践は干乾びるだけである (*śuṣyanti : bskam*)。 (27)

ダルバ草の束の先によって足から血が流れているような人には

その後、来世でどのような別の苦しみが生じるだろうか。 (28)

骨と皮しか残らなくなった苦行者たちは人が食べているのを見て、

死霊のように、他人から与えられたものを常に食べている。 (29)

息子よ、森の生活は埃の上着 (を着るの) に等しい。

梵行を守ることはマカラのいる海を干す (のに等しい。) (30)

森林を焼く火の煙でぞっとするほど顔をしかめているようであり、

蝙蝠 (*gonāsa: pha wang*)³³ の巢や、フクロウが住む深い洞穴を住処とし、

獅子に襲われた象の血で赤くなった森に、

家を捨てて (行って)、誰が満足しようか。 (31)³⁴

愛欲ある者は自己の抑制を求め、自己を制御する者は若い女性との交わりを思い出す。

満足した者はより厳しい規律を楽しむが、空腹になると食べ物を望む。

一人でいると人恋しくなり、人々の集まりに嫌気がさした者は森を望む。

(何か新しいことを) 追い求めることに専念する者は、捨てるや否や再び軽蔑だけを得る³⁵。 (32)³⁶

息子よ、私を捨てて森に行ってはならない。

汝の敵たちの方が (反対に) 森に住みたいという願いがあるように。 (33)³⁷

王の尊大な栄華は (*nṛpa-saṃpadaḥ : rgyal po'i phun tshogs*)、真珠で笑いを明らかにし、

鳶のような剣を持っているが、

一度捨てれば再び帰ってこないものだ。」 (34)

王、大臣の勧めにより、王子の出家を許す

父によって何度もそのように言われたが、彼 (の王子) は決心から逸脱することはなかった。

³² 森での苦行によって身体が枯渴 (*śuṣ-*, *śoṣaya-*) することに関しては、原 [1979: 127-31] を参照。

³³ 蔵語訳では、*pha wang* 「コウモリ」と翻訳されているが、サンスクリット語の辞書では確認できない。

³⁴ 韻律は *Vasantatilakā*。

³⁵ 原文は *tyaktvānveṣaṇatatparāḥ punar api prāpyāvamānaṃ janāḥ* // であるが、Straube [2010 : 104, n. 49] は *tyaktvānveṣaṇatatparāḥ punar api prāpāvamānaṃ janam* // と修正して読む。

³⁶ 韻律は *Śārdūlavikrīḍitam*。

³⁷ 第33偈から第40偈までの韻律は *Anuṣṭubh*。

実に偉大な人たちの決意は金剛石の先のように (固い) ものだ。(35)

母 (=王妃) たち、大臣たち、親戚、街の有力者によって³⁸、

(留まるよう) 依頼されても、彼は沈黙を守って3日間食をとらずにいた。³⁹ (36)

「王権を享受する者であれ、苦行者であれ、この方は彼自身の望み通りに生きるべきです。

この世の人は欲に従うものです。」と、大臣たちは⁴⁰王に言った。(37)

王子、あらゆる生類に慈愛の心を持って森で生活

目に涙をためた王によって何とかして (kathamcid : ji zhig ltar)⁴¹許された彼 (の王子) は、都の市民の嘆きにも沈黙して (応えることなく)、聖仙の苦行林に赴いた。(38)

離欲の気持ち (vairāgya- : chags bral) 十分に熟したことにより、彼はそこで慈悲の心で (maitrī- : byams pas) 清められ、

分別智に (viveka- : dben pa'i) 好まれた (dayitām : grogs su) 慈愛の心 (dayām : brtse ba)、あらゆる生類に分け与えた。⁴² (39)

その森に住むものたちの心の働きは、彼の威光によって

生まれつきの憎しみの火を捨てて涼しくなった。(40)

カモシカの群れを追っていた山の獵師らが、生き物の殺害を完全に放棄した時、

ライオンが象を引き裂くことを放棄することに完全に同意した時、

そこにいる山の民キラータ族の (Kirāta-) 女たちは、腰に孔雀の羽の覆いを欠き、真珠の飾りがなくなり、

(彼女らの) 唇はため息⁴³のために色あせ (virāga- : chags bral) 乾いている。(41)⁴⁴

海を紐とする大地を (kṣamām : sa) 捨てて、一切衆生に対する忍耐を (kṣamām : bzod

³⁸ SBV (pp. 5-7) には、王、後宮の妃・大臣・プローヒタ、次いで大臣やプローヒタの息子たちの順で、王子に苦行がいかに大変であり、王権を行使して、布施をして功德を積む方がよっぽど良いと説得するが王子は黙ったままであった、とある。

³⁹ SBV (p. 5) にも、王子は6日間まで断食を (yāvad ṣaḍ bhaktacchedān akārṣīd) したとある。

⁴⁰ SBV (p. 7) では、大臣やプローヒタの息子たちが、王に王子の出家を許すよう (anujānīhi) 懇願したとある。

⁴¹ Straube [2010: 105, n. 53] に従って、蔵語訳の stas を stes と訂正した。

⁴² SBV (p. 7) にも、彼はあらゆる生類に対して強い慈愛を持ち、彼のこのような慈悲心によって、肉食動物でさえ、彼の庵で安心して過ごし、罪を犯すことはなかった。そのため彼には「忍耐を説く人」という名前が付いた (so 'tyantaṃ sattveṣu dayāvān saṃvṛtṭaḥ ; tasyaitayā matryā (maitryā ?) vyādamṛgā apy āśramapade viśvāsam āpadyante; nāparādhyanṭe ; tasya kṣāntivādī kṣāntivādīti saṃjñā saṃvṛtṭaḥ;) とある。

⁴³ 蔵語訳では shugs rings。本文献では「ため息」を shugs rings と綴ったようである。「ため息」の本来の綴りは shugs ring。これまでに翻訳した箇所からは第37章にも同じ綴りが見られた。蔵語訳では38章第57偈。

⁴⁴ 韻律は Śārdūlavikrīḍitam。

pa) ⁴⁵実践した、

彼のカーシスダラはクシャーンティヴァーディン (Kṣāntivādin : bzod pa smra ba、忍耐を説く者) として知られた。(42) ⁴⁶

カーリブー王、王妃たちと一緒に遊林に戯れながら、苦行林に至る

その間、大地の喜びであるブラフマダッタ王が天に召された時、一切衆生にとっての恐怖のような、カーリブーが (Kālibhūr : dus kyi sa) ⁴⁷ 王になった。(43) さて、ぶんぶんと音をたてて飛び回る多くの蜂のせいで眉を曲げ、しかめ面をした ⁴⁸、聖者の自己抑制の敵である、春が現れた。(44)

愛の女神の興奮が具現化したような、開花したマンゴーの花の光が輝き始めた。

(その輝きは) 雌鹿の目をした女性の傲慢さを打ち砕く使者でもあった。(45)

マラヤ山脈から (Malaya-: ma la ya) 吹く風は、赤いアショーク樹の傍らにある蔓草に抱きしめられるのを恐れて、まるで嫉妬しているかの如く (その樹の) 花を奪い去った。(46)

この季節、カッコーがいっぱいの、若さのような (=花咲くような) ⁴⁹ 遊園に、

王は後宮の妃を伴って森の光景に好奇心を抱いて出かけた。(47)

様々な種類の落ちた花が積もった、

遊園を見ながら、彼は次第に苦行林に (tapovanam: dka' thub nags su) ⁵⁰ 到達した。(48)

王が眠りに落ちている間、後宮の妃たちは仙人を取り囲む

その森の美しい場所で、長い間女性を伴って楽しんだ後、

性の戯れで疲れて (rati-viśrāntaḥ)、すぐさま (王は) 眠ってしまった。(49)

⁴⁵ サンスクリット語 kṣamā には「大地」と「忍耐」の2つの意味がある。

⁴⁶ 第42偈から第74偈までの韻律は Anuṣṭubh。

⁴⁷ 第3偈は Kālabhū とある。同一人物であるので、どちらかに統一すべきであろう。Straube [2010 : 107] は Kālabhūr と蔵訳 dus kyi sa に従い修正している。SBV (p. 7) では Kalabhū。

⁴⁸ 原文は malinānaḥ。Straube [2010 : 107, n. 58] は『カルパラター』第64章の箇所 malinavadanāḥ (64.326) を指摘する。蔵語訳は、bzhin ras log 「悪い顔つき」。

⁴⁹ 原文 yauvane (: lang tsho rgyas pa) は「若さ」「花咲く」の2重の意味をもつと解した。Straube [2010 : 107, n. 61] を参照。

⁵⁰ SBV (pp. 7-8) では、王子は、阿蘭若の草では生きてゆけないので、村の近くに行きたいと申し出、師に許可をもらおうと、ベナレスに行き、寂静の精舎を探しながら、あちこち歩き回り、次第に父の静かな遊園に到達した。そこで歩き回りながら、静かな場所を発見した (na śaknomy āraṇyakābhir ośadhībhir yāpayitum ; grāmāntaṃ samavasaraṃmīti ; ...sa upādhyāyāl labdhānujño vārāṇasīm gatvā śāntavihārasamanveṣaṇayā itaś cāmutaś ca paribhramam anupūrveṇa pituḥ santakam udyānaṃ gataḥ ; tena tasmin paryatāḥ śāntaḥ pradeśo dṛṣṭaḥ ;) とある。そのため彼はこの時点で苦行林ではなく、遊園にいたことになる。

そこでは、未だかつてないほどの花に笑いながら、花束を集めて、
後宮の妃たちは揺れる蔓のように歩き回った。(50)

王、王妃たちが瞑想するクシャーティヴァーディンを取り囲んでいるのを見る

その間、クシャーティヴァーディンは (Kṣāntivādī)、人里離れた場所に (viviktoddeśa- : dben pa'i gnas na) 満足し、

寂寥の地にも (ekānte) 動じることなく、寂静を (śāntim: zhi ba) 念じていた。⁵¹ (51)

多くの⁵²喜びを滴らしており、賢者たちに敬われるべき存在であり、

痩せていても (kṛṣo : rid)、その美しさが完全であるのは (akṛṣa- : ma nyams pa)、まるで昇ったばかりの月のようであった。(52)

成熟して (pariṇāma- : yongs su gyur pa) 好ましく、皴の (rekhā- : ri mo) 箇所にも輝き、老齢でも (purāṇa- : rnying pa) 美しい容色の故に、彼の姿は (tad-ākṛtiḥ : gzugs) 空しくない。

新月になっても美しく、弦の場所で輝き、

満月の美しい形容の故に、その(月の)姿は空虚でないようなものだ。(53)⁵³

王の妃たちは、心の鏡を清めるような彼を見ると、

絵に描かれたかのように、まさにその場に動かずに立ちすくんだ。⁵⁴ (54)

さて、王はすぐに目覚めると、女性たちが(自身の)前に見えなかった。

(彼は) 森を捜し、(女性たちが) 仙人を囲んで佇んでいるのを見た。(55)

王、嫉妬により毒のような言葉を投げかける

彼女たちを見るやいなや、嫉妬の (īrṣyā- : phrag dog) 毒で一杯になって、まるで蛇がヒューヒューと音を出すように、

(王は) 言葉の形をとった多くの毒を投げかけた。(56)

「お前は誰か。聖者という称号のある、風変わりで偽りの飾りで (-mātrayā)、

⁵¹ 原文 antarvicintayan を de Jong に従って anuvicintayan (: rjes su sems byed cing) に訂正した。

⁵² サンスクリット語 amanda- を 蔵語訳では mi dman 「良い」(否定辞の a と manda 「低い」) からと訳出しているが、「多くの」の意味で取った。

⁵³ Straube [2010 : 109, n. 63] は「二重の意味」(śleṣa) の可能性を指摘する。その場合、原語 pariṇāma, rekhā, purāṇa がそれぞれ、「成熟」と「新月」、「皴」と「弦」、「老齢」と「満月」の両方の意味に理解できるかどうか確認する必要がある。特に purāṇa は、pūraṇa, pūrṇa の可能性もある。

⁵⁴ SBV (p. 8) には、「その間、クシャーティヴァーディン仙人が威儀を整えて、一面に座っているのを見た。再び見た後、一連の心の動きが尊敬の念に満たされ、その仙人に挨拶の礼をする、彼を取り囲んでいた。」(yāvat paśyanti kṣāntivādinam ṛṣim ekānte śānteryāpathe niṣaṅgam ; dṛṣtvā ca punar gauravāpyāyita-cittasantatyah tasya ṛṣeḥ praṇāmaṃ kṛtvā parivāryāvasthitah ;) とある。

女たちをかどわかす(汝は)心が純朴な(女たちを)まさに盗み取ろうとしている。(57)
他人の女性を誘惑すること(だけ)を瞑想し(dhyānaṃ)⁵⁵、その妨害を回避すること(だけ)に念誦が(japas: bzlas pa)ある。

お人好しを安心させることに⁵⁶苦行をする(tapaḥ : dka' thub)。(これが)詐欺師たちの最上の方策である。(58)⁵⁷

ああ、口に蜜のような甘さのある詐欺師で、樹の皮を身に着けた汝の皮膚は(kṛttir)⁵⁸迷妄を⁵⁹生じさせる。

ああ、まるで森の毒樹の木の皮が⁶⁰失神を生じさせるようだ。(59)

仙人のやり方と同じ装いをし(muni-kalpa-sama-ākalpaś : thub par brtag pa lta bui' chas)、さらに同じような行動でありながらも、

(それは)偽りで成就されたものである⁶¹。一体誰が内なる本質を知ろうか。」(60)

王、仙人の忍耐力を試そうと、彼の両手を切り落とす

怒りから王によってこのように言われたが、怒りを離れた柔らかい心情のあるクシャー
ンティヴァーディンは、心を動揺させることなく、彼(の王)に言った。(61)

「私はクシャーンティヴァーディン(忍耐論者)という聖者です。私を疑うことなかれ。
これらの女性たちと蔓とは、私にとっては何の違いもありません。」(62)

このような彼によって語られた(言葉)を聞くと、「今、貴様の忍耐力を試して見よう。」
と言いながら、王は彼の両手を刀で切断した。(63)

切られても⁶²、忍耐の習性があり、動じない彼を見て、
彼の平静にさえ⁶³嫉妬した王は、さらに両足を切った。(64)

⁵⁵ P : bsam gtan, D : bstan. 意味上、北京版に従った。

⁵⁶ 原文は -āśvāsanam であるが、Straube [2010 : 110] は -āśvāsane と修正する。

⁵⁷ 瞑想(dhyāna)、念誦が(japa)、苦行(tapas)は聖者の修行徳目であるが、ここでは他人の女性を誘惑する手段と悪く表現している。

⁵⁸ Straube [2010 : 110] に従って、原語の vṛttir を kṛttir (: pags pa) に訂正した。

⁵⁹ 原文 moha を「迷妄」と「失神」との2つの意味に理解した。

⁶⁰ 蔵語訳では、dug gi ljon pa bcad pa bzhin 「毒の樹を切ったかのように」となっている。

⁶¹ 原文は siddhiṃ sambhāvitāṃ vāpi であるが意味がとりにくい。ここでは de Jong に従って dambhasambhāvitāṃ vāpi (: tshul 'chos kyis... bsgrubs pa) に訂正した。さらに、Straube [2010 : 111, n. 71] は dambhasambhāvitāṃ *api の可能性を指摘する。ここでは *api の読みに従って試訳した。

⁶² 原文は viśase であるが、Straube [2010 : 111] に従って viccheda に訂正した。この箇所蔵語訳は khyad par du 'ang // rnam ba gyur med pa 「特別に〔彼の〕様子に変化がないことを」、となっているので、viśase ではなく、viśeṣa と理解したと考えられる。

⁶³ 原文は praśamāya であるが、Straube [2010 : 111]、de Jong に従って praśame 'pi (: rab zhi la yang) に修正した。

[格言1] 悪人というものは、まるで犬のように、道に不浄を (asīvaṃ : dge ba min pa)⁶⁴ まき散らし、舌で汚し、
最後には肢体を切り刻んでしまうものだ。(65)

[格言2] 叩かれても忍耐に専念し、肩を切られても沈黙を守り、
ひどい苦しみにも涼しげであり、彼らは松の木のように真っ直ぐである。(66)

クシャーティヴァーディンの忍耐

彼は手足を切られたが、ひどい痛みを抑え、
怒りによる (manyu- : khro bas)⁶⁵心のざわつきを忍耐をもって防いで次のように考えた。
(67)

「非道な行いをする彼によって⁶⁶、私の肢体が切り落とされたように、
そのように、私は輪廻の恐るべき苦悩を断ち切るべきである。」⁶⁷ (68)

王は自身の行為を悔い、許しを請う

怒りの惑いから、王は聖者を (自身の) 兄弟であると知らずに⁶⁸、
都に向けて出立したとき、大地は悲しみで萎れたように (-mlānā)⁶⁹塵で汚くなった。(69)
その後、彼のクシャーティ (ヴァーディン) の守り神は⁷⁰、彼の苦しみにより王に対

⁶⁴ 原文 asīva の用例に関しては、Straube [2010 : 112, n. 75] を参照。

⁶⁵ とともに「怒り」を意味する、manyu と krodha について、前者は忍耐により抑えることが可能であるが、後者はコントロールできないという相違点を指摘する Hara [2001] を Straube [2010 : 112, n. 77] は紹介している。

⁶⁶ 蔵語訳では、/ji ltar 'di yis las gzhan rnam // btang nas.「[凶暴さ以外の]他の行動を捨てた彼によって」となる。サンスクリットを、tyakta-anya-karmaṇā anena と解したとみられる。

⁶⁷ SBV (p. 8) の偈のほうがわかり易い。「たとえ肢体を何百の胡麻のように (切り刻んで) 大地に捨てようとも、私は、たとえ肢体が何百の胡麻のように刻まれても、忍耐を捨てません。私の心にある正常な慈悲の気持ちはいつも辱めをうけても、私はその忍耐を決して捨てません。ちょうど息子を愛する母が息子を捨てようとしないように。(yadi tilaśatam api kṛtvā kṣepsyase kāyam urvyām na tyājāmi kṣāntiṃ tilaśato 'pi cūrṇitagātraḥ / yasya mama śubhā mairī cetasi paribhāvītā sadā kṣāntiṃ tāṃ notsahe vihanuṃ sutam iva sutavatsalā janāni //)。

⁶⁸ 原文は avajñāya (軽蔑して) であるが意味をなさない。de Jong に従って、avijñāya (: ma shes par) に訂正した。

⁶⁹ 原文 -mlānā には「萎れた」や「汚い」の意味がある。Straube [2010 : 113, n. 80] を参照。

⁷⁰ 原文は、tatas tadduḥkhakupitā rājñe tatṣāntidevatā /cakre nagaryāṃ durbhikṣa-marakāvṛttiviplavam //。SVB (p. 9) には、同様な表現として udyānanivāsīnī devatā kṣāntivādīno ṛṣer abhiprasannā ; tayā tīr utsṛṣṭā ; yena devo na varṣati ; mūṣikāḥ śalabhāḥ śukāḥ prabalāḥ saṃvṛttāḥ ; janakāyaś ca mriyate とある。これによれば、原文の tatṣāntidevatā とは、「クシャーティヴァーディン聖者を嘉する神」(kṣāntivādīno ṛṣer abhiprasannā) となる。原文にある疫病の記述はないが、その代わり、神は雨を降らさず、鼠、イナゴ、鸚鵡などが急増し、多くの人たちが死ぬ、とある。

して怒り、

都に飢饉、疫病、旱魃の災いをなした。⁷¹ (70)

王は、占い師から神の怒りから生じた災難は、聖者への暴行のせいだと知って、

彼（の神）を⁷²宥めるために (prasādayitum : dad par byed du) 出かけた。⁷³ (71)

彼（の王）は彼（のクシャーンティヴァーディン）の足元に跪き、「許して下さい。」と言うと、後悔からの落胆によって正気を失ったかのようにであった。⁷⁴ (72)

クシャーンティヴァーディンによる許し

クシャーンティヴァーディンは彼（の王）に言った。「王様、私にほんの僅かさえ怒りはありません。

一連の業の流れが決まっていますから (karma-rekhā-paricchedād : las kyi ri mos yongs bcad pas)、このように運命づけられているのです (bhavitavyatā : myong bya myid)⁷⁵。(73)
[格言3] あらゆるものを食べ尽くす⁷⁶、運命の定めは (-bhavitavyatā : myong bya) 自らの

⁷¹ SBV (p. 9) にも、神は仙人の手足を切った王に対して怒りを抑えきれず、仙人の前で「カラブー王を、息子・妻、親戚縁者たち、都の人たちともども、我は消滅させよう。あらゆる生き物たちにその旨を知らせなさい。」(kalabhūm saputradāraṃ sabandhuvargaṃ sapaurajānapadam / kṛtsnaṃ ca jīvalokam ājñāpaya nāsayiṣyāmi // iti) という偈を説いた。

⁷² 原文は tam であるが、神 devatā との関係から女性代名詞の必要がある。ここでは de Jong に従って tām と改めた。

⁷³ SBV (p. 9) にも同様な表現がある。王は占い師たちを (naimittika) 呼んで尋ねた。占い師たちは答える。「王様、神の怒りです。クシャーンティヴァーディン仙人を嘉する神が怒っています。彼（の神）によって、このような疫病が放たれました。」(deva devatāprakopa iti; yā devatā kṣāntivādīno ṛṣer abhiprasannā sā kupitā; tayā eṣā itih sṛṣṭā iti;)。王は問う。「諸君、どうすれば彼（の神）を宥めることができるか。」(bhavantaḥ katham atra pratipattavyam iti;)。占い師たちは答える。「王様、バリの食物、花輪のお供えによって怒った神々は宥められます。バリの食物、花輪のお供えをなして、(神々よ)『お許しください。彼の聖者も(お許しください)。』と言って」(deva balimālyopahāreṇa devatāḥ prakupitā ārādhyaṇte; balimālyopahāraṃ kṛtvā kṣamāpayitavyā sa ca ṛṣir iti;)。

⁷⁴ SBV (p. 10) に、「人々は、まさにその夜、バリの食物・花輪の供え物を集めて、その園に行った。王は後宮の女性を伴った。それから人々は沙門・バラモン・困窮者・乞食者らに贈り物を与え、神のいる場所で大きな供養を行い、神に許しを請うた。それから王はクシャーンティヴァーディン仙人の近くに行き、両足にひれ伏し、許しを請い始めた。『大聖よ、お許しください。私は心が対象に執着し、怒りで混乱したため、御身にたいして罪を犯しました。』(janakāyas tām eva rātriṃ balimālyopahāraṃ samudānīya tad udyānāṃ gataḥ; rājā cāntaḥpurasaḥiyasaḥ; tato janakāyena śramaṇa-brāhmaṇa-kṛpaṇa-vanīpakebhyo dānāni dattvā devatāsthāne ca mahatīm pūjāṃ kṛtvā sā devatā kṣamitā; tato rājā ṛṣeḥ kṣāntivādīnaḥ sakāśaṃ gatvā pādāyor nipatya kṣamayitum ārabdhaḥ; kṣamasva me maharṣe yan mayā viṣayādhyavasitena krodha-paryākulīkṛta-matinā tavāparāddham iti;)。

⁷⁵ Straube [2010: 114, n. 82] は、この bhavitavyatā の用例を『カルパラター』(2.30d; 48.31; 59.151cd) を列挙し調べている。

⁷⁶ 原文は sarvāṇi であるが、意味をなさない。ここでは de Jong に従って、sarvāṣiṇī (: thams cad za

思いのままであり、

堅固さ、美德、財産、苦行、尊敬を考慮しないものです。(74)

[格言4] 発生の場所では、より大きな木の根で力強くなる、自らの業という木の果実は、中に存在する⁷⁷発育の種で連続していき、種々であり、時が経つと熟して色づくが、人は(その果実を)食べるように(業果を享受します)。(75)⁷⁸

真実語

それゆえに、王よ、私はあなたに対して何ら恨みは(vikāro: rnam 'gyur)ありません。

この真実によって、私の血が乳の状態となったのをご覧下さい。(76)⁷⁹

四肢を切られても、もし私の心が汚れなければ(akaluṣi: sdig med)⁸⁰、

その真実によって私の同じそれらの四肢がくっつきますように。」(77)⁸¹

このように、清浄な心をもった彼の強い真実の願いのため(-tīvrasatyopayācānāt : mchog tu bden pa brjod pa las)、

他ならぬそれらの四肢はすぐさまくっついて、健康な状態となった。(78)

王、仙人に助けを請う

そして王は、王冠で(仙人の)足に触れて言った。

「聖者よ、あなたには非常に大きな力があります。苦行であなたは一体何を望まれるのか。(79)

悲の蔵である者よ、あなたは功德の手助けによって⁸²、迷妄で盲目となり、

byed) と訂正した。また原文、de Jong とともに svacchandā bhavitavyatā であるが、ここでは Straube [2010: 115] に従って svacchandabhavitavyatā と読んだ。

⁷⁷ 原文は antra- (内臓) であるが、ここでは Straube [2010: 115] に従って antaḥ- (: nang na 「内に」) と読んだ。

⁷⁸ 韻律は Vasantatilakā。

⁷⁹ 第76偈から第85偈までの韻律は Anuṣṭubh. SBV (p. 10) では仙人の許しの証左として (katham jñāyate) この真実語が述べられる。「『あなたが(私の)肢体に剣を振り下ろそうとも、あらゆる生類にたいして私には慈悲心があります。この点についてももしあなたに疑念があるならば、私の清い(流れ出る?)血を御覧下さい。』このように言うと、彼の血は止まった。」(gātreṣu vahasi śastraṃ maitrī me sarvasattveṣu / yadi saṃśayo 'tra bhavatāṃ paśyata rudhiraṃ prasannam (prasyandan?) me // iti ; tasya tad rudhiraṃ parāvṛttam (parāvṛttam?)) とある。

⁸⁰ SBV (p. 10) では、āghāta (苦悩、傷つき) とある。

⁸¹ SBV (p. 10) は、先の血が止まるといった奇跡を見ても、なお仙人の許しを信じようとしなかった王に対して、肢体を元通りにするという真実語を仙人は述べたとする。

⁸² 原文は hasta-puṇya^avalambena とあり、蔵語訳の lag pa'i 'chel sas では意味が通らない。lag pa'i 'dzar pas か。

罪の淵に落ちた⁸³私を、引き上げてください。」(80)

仙人は人々や王さえも救うため、無上正等覚を求め

このように王に請われると、仙人は彼に答えた。

「沈んだ者たちを引き上げるため、縛られた者たちを解放するため、(81)

恐れている者たちを安心させ、迷惑している者たちを鎮静するために (nirvāṇāya : thar bya'i slad)、

王よ、私は無上正等覚を (anuttarāṃ samyaksambodhim : bla med yang dag par rdzogs pa'i byang chub) 望みます。(82)

さて、その無上の正等覚を私が得ると、

その時に、私は智慧の剣でああなたの迷妄を断ち切りましょう。」(83)

このように言うと、彼に別れの挨拶をして (āmantrīya : khams bde byas nas)、仙人は自分の庵に向けて出立した。

彼のことだけを心に念じながら、王もまた王宮に帰った。(84)

過去世と現在世との結合

「彼のクシャーントィヴァーディンは私に他ならず、カーラプーはカウンディンヤ (Kaundinya) である。⁸⁴

今、無上正等覚に達した後、私はこの者を救い上げたのだ。」⁸⁵ (85)

このように、蓮のような善逝の顔から流れ出た甘い蜜にも似た清らかな言葉を、蜂の群⁸⁶のような比丘たちのサンガが飲むと、(彼らに)何がしかの歓喜が現れた。(86)⁸⁷

⁸³ 原文は pāpavasāne であるが、ここでは de Jong と Straube [2010 : 116] に従って pāpāvapāte (: sdig pa yis g.yang la) と訂正した。

⁸⁴ SBV (p. 10) も同じ。

⁸⁵ 本文が無上正等覚であるのに対し、SBV (p. 10) では、彼が王に対して慈悲の心を起こし、この善根によって煩惱を断ち切ろうという誓願を立てた (yan mayā tasyāntike maitracittam utpādyā praṇīdhānam kṛtam, anenāhaṃ kuśalamūlenāsya ākāryākārya kleśān chedayeyam iti;) とある。

⁸⁶ 原文は bhramara-bhava であるが、ここでは de Jong と Straube [2010 : 117] に従って bhramara-bhara (: bung ba'i tshogs) と訂正した。

⁸⁷ 韻律は Puṣpītāgrā。

作例解析

1. チベットのタンカセットにおける作例解析

チベット語訳『カルパラター』第30章となる「カーシスダラ・アヴァダーナ」に説かれる忍耐論者の仙人の物語の部分は、第39章の「クシャーンティ・アヴァダーナ」と共通する。チベットにおけるこのテーマに関する文献と絵画作例については既発表の作例解析に述べた⁸⁸。本稿では、これまでの発表と同様に、チベットにおける『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』に基づく複数の絵画セットについてそれぞれの作例解析を行う⁸⁹。はじめに、「ナルタンのタンカ」の一例をデリーのチベットハウス所蔵のタンカを参照して、物語の場面を表す絵と銘文を同定する。次に、それと同じ系統にある「41幅のタンカ」から、インドのダラムサラにあるタンカにおける同定を行う。さらにそれら二つと全く様式と構図が異なる「シトゥのタンカ」を解析する。

2. 「ナルタンのタンカ」における同定

「ナルタンのタンカ」では、「右10」とされるタンカの中央の釈迦座像の左部分に「カーシスダラ・アヴァダーナ」の情景を示す(図1)。釈迦牟尼が坐す蓮華座の左に王宮があり(図2)、その下に描かれる石碑を模した図の中に「第30章カーシスダラ・アヴァダーナ」と記される⁹⁰。題字の

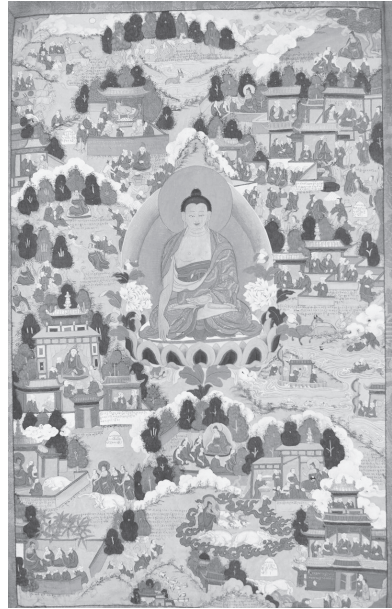


図1 「ナルタンのタンカ」
Tibet House New Delhi 蔵 「右10」



図2 「ナルタンのタンカ」(図1左部分
拡大図) 出家を許されるカーシス
ダラ

⁸⁸ 引田弘道・大羽恵美 「クシャーンティ・アヴァダーナ『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第38章和訳」『愛知学院大学文学部紀要』第47号103-117頁、2017年。

⁸⁹ それぞれの絵画セットの概要については以下の作例解析を参照されたい。引田弘道・大羽恵美 『『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章、34章和訳』『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』第30号240-213頁、2015年。

⁹⁰ “Yal 'dab sum cu pa bzod pa ka shi mdzes pa'i rtogs brjod”「第30章カーシスダラのアヴァダーナ」



図3 「ナルタン」のタンカ(図1左部分拡大図) 禅定するカーシスングラと宮廷の女性



図4 「ナルタン」のタンカ(図1左部分拡大図) 王によって切られるカーシスングラ

上に描かれる王宮の中央の建物の中に父王を表し、その横に王妃、前に二人の息子を配している。このシーンは王の息子であるカーシスダラが父王に出家の許可を得る場面である⁹¹。その上には(図3)忍耐論者(クシャーンティヴァーディン)と呼ばれるようになったカーシスダラが坐し、左には宮廷の女性たちが合掌している様子を表す⁹²。その右にはクシャーンティヴァーディンに群がる女性たちを見つけるカーラブー王と侍者がおり、下には(図4)、クシャーンティヴァーディンの腕を捕まえている男性たちの一群がある。そのうちの一人は刀を振り上げており、まさにクシャーンティヴァーディンの腕を切り落とそうとしている。その左下には(図5)、男性の出家者像を上下



図5 「ナルタンのタンカ」(図1 左部分拡大図)
カーシスダラの手足切断と回復、王の謝罪

に二回表しているが、下に、手と足が切断された状態のカーシスダラと、その上には真実語によって身体を回復した同人物の様子を表している。

本タンカは、簡潔ではあるが、物語の前半部分の父王と王子カーシスダラとのやり取りや、出家の許可を得たこと、森の中の禅定と王宮の女性たちの崇拝の対象となったこと、王の嫉妬、さらに王によるカーシスダラの四肢の切断、最後に四肢の回復といった物語の主要なシーンを抽出して分かりやすく絵画で表している。銘文と絵図はテキストに基づいているが、銘文に使われる語句は原文と同じではない。また、原文は偈文であるが、銘文は散文となっている。

⁹¹ 王宮の門扉の右壁に銘文が書かれる。“sngon ba ra na sir rgyal po tshang byin la bu gnyis byung ba dus kyi sa rgyal sar ’khod ka shi mdzes nag su ’gro bar yab la zhus te ’gro ba”「昔、ヴァーラーナシーのブラフマダッタ王にカーラブーとカーシスダラの二人の息子がおり、カーラブーは都におり、カーシスダラは森に行くことを父王に伺って出て行ったこと」

⁹² カーシスダラの坐像の下に赤字で銘文が書かれる“dus kyi sa’i btsun mo nmams ka shi mdzes bzod pa smra bar bgyur ba la dad pas dus kyi sa khros te yan lag nmams bcaad pa”「カーラブー王の妃たちが忍耐論者と呼ばれるカーシスダラを信奉していたのでカーラブー王は怒って〔カーシスダラの〕四肢を切断したこと」

3. 「41幅のタンカ」における同定

「41幅のタンカ」セットの中で「右12」とされるタンカの釈尊坐像の左に本アヴァダーナが表されている(図6)。タンカの右部分(図7)の中央に王宮が表されており、その中の最も大きな建物の中に、王冠を付けた王が二人の妃に伴われて表されている。その面前には、王子のカーシスダラと髭を生やした大臣が座っている。これはカーシスダラが出家を願って王と対面するシーンであり、大臣は出家の許可を進言した人物であろう。その手前のやや小さな建物の中にも王や王子、侍者が描き込まれるので、この箇所は物語前半部分の、王子として生まれたカーシスダラが出家を願い、最後には反対していた王の許可を得た部分を表している。タンカの右上には(図8)、図中の上に樹が茂る森を描き、その前に僧衣をまとったカーシスダラが瞑想している様子を表している。彼の前には、色とりどりの衣をまとい、長い髪に髪飾りを付け装飾した宮廷の女性が四人座っている。それぞれが胸の前で合掌をしており、目の前にいる忍耐を説く美しい仙人への崇敬を表している。その右下には、男性の一群があり、そのうちの二人は仙人が女性たちに囲まれていることを非難するかのように手を挙げている。一人は帽子を付け、大きな襟のあるマントを羽織っているため、これがカーラプー王であると考えられる。その左に目を移すと、男性たちが仙人の両腕を両側から捕まえており、女性に制止されているにもかかわらず



図6 「41幅のタンカ」 「右12」



図7 「41幅のタンカ」(図6右上部分拡大図)
出家を許されるカーシスダラ

『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第29章和訳 (引田・大羽)

わらず、カーラブー王が剣を振り上げその仙人の腕を切ろうとしている。物語は左下へと移る (図9)。図中左にカーシスダラが両手首と両足首を切り落とされた状態で坐している。その上には四肢を回復した様子と、王と侍者たちを表す。物語の最後の箇所、王がカーシスダラに許しと助けを請う箇所を示すと考えられる。

上記のチベットハウスの作例と本タンカを比較すると、それぞれのシーンの配置は異なるものの、人物を含めた場面の描写方法や様式は、細かい点を除けばほとんど同じであると言えるだろう。



図8 「41幅のタンカ」(図6右上部分拡大図)
上：禅定するカーシスダラと宮廷の女性
下：王によって切られるカーシスダラ



図9 「41幅のタンカ」(図6右上部分拡大図) カーシスダラの手足切断と回復、王の謝罪

4. 「シトゥのタンカ」における同定

「シトゥのタンカ」では第28章から第33章までが描かれるタンカに表される⁹³。タンカの右側の中ほどの一面に本アヴァダーナの情景が示される（図10）。本作品には題字が金字で書き込まれるだけで、物語の場면을記述するような銘文はない。図の上部に樹木が茂る森が表わされており、樹の根元には花が咲き、季節が春であることを示している。その手前の左には、男性が坐して禅定する様子を表すが、その前には髪飾りやストールを付けた宮廷の女性たちが描かれる。これはカーシスンダラが森で禅定していたところに女性たちが集まってきたことを表しているのであろう。その右下には彼女たちを指さし、眉をしかめて立つ男性像が描かれる。これは女性たちが美しい修行者であるカーシスンダラを囲んでいるのを見たカーラーブ王であろう。その上にカーシスンダラが両腕と両足を刀で切断されるシーンが表わされる。彼はこのようなことにあっても忍辱を継続していたが、真実語によって身体を回復する。そのシーンが図中右下の、男性がにこやかに足を伸ばして座る姿とその前の合掌する人物によって表される。



図10 「シトゥのタンカ」カーシスンダラの物語該当箇所

⁹³ 以下を参照した。田中公明、『チベット仏教絵画集成』第3巻、臨川書店、2001年、60頁。

5. まとめ

「カーシスダラ・アヴァダーナ」の出家以降の物語は、第39章の「クシャーンティ・アヴァダーナ」と内容が共通するため、絵画においても同じように表されている場面がほとんどである。異なるのは「クシャーンティ・アヴァダーナ」では、仙人の四肢を切断した王がその後に膿にのまれて地獄に落ちたとし、絵画中では王が体中の皮膚に斑点を出現させて表されていた⁹⁴。「カーシスダラ・アヴァダーナ」にはその件はなく、最後に王は仙人に許しを請い、助けを求める姿で表される(図5と9参照)。「クシャーンティ・アヴァダーナ」においての地獄に落ちたカリ王はデーヴァダッタの前生であり、本アヴァダーナのカーシスダラが最終的に救い上げたカーラプー王はカウンディンヤの前生である。

「ナルタンのタンカ」には場面を記述する銘文があるため、具体的に特定できないシーンの同定が可能となる。例えば王宮の中に複数の人物を描きこむことは他の物語にも多く見られるが、このような場合、正確に物語や場面を同定することは困難であり、銘文が同定の手掛かりとなる。さらに「ナルタンのタンカ」における物語の同定をもとに、「41幅のタンカ」も正確に同定することが可能となった。「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」は様式的に似通っている。「シトゥのタンカ」は上記の二つのタンカとは全く異なる。いずれも文献の記述に基づいて表されている。

参考文献

- Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha.* 1980. Paris: Editions Sciaky.
- Padma-chos-'phel, Deborah L. Black, and Kṣemendra. 1997. *Leaves of the Heaven Tree: The Great Compassion of Buddha.* Berkley: Dharma Pub.
- rTogs brjod dpag bsam 'khri shing gi snyan tshig gi rgyan lhug par bkrol pa mthong ba don ldan.* 1981. Delhi: Karmapa Chodhey.

図版出典

- 1 筆者(大羽)がTibet House New Delhiにおける現地調査で撮影した画像を編集して作成
- 2 図1部分図
- 3 図1部分図
- 4 図1部分図
- 5 図1部分図
- 6 Sciaky版(*Forty-one Thangkas*, 1980)通し番号12
- 7 図6部分図

⁹⁴ 註88に同じ。

人間文化 第33号

8 図6部分図

9 図6部分図

10 田中前掲書掲載の図を編集して作成

* サンスクリット原文からの和訳は引田弘道と紅林直也が中心に行い、蔵訳と絵図の解析は大羽恵美が行った。